

# 地域生活障害者の介助をすることの積極的意義

—グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて—

在 原 理 恵

Positive significance of care for people with disability: A grounded theory approach

Rie Arihara

本研究の目的は、地域で生活を送る障害者とその介助者が営んできた日々の実践とはどのような意義があるのかについて、介助者の視点から、グラウンデッド・セオリー・アプローチによって解明することにある。

20名の介助者へのインタビューを行い、その経験による影響や変化の観点と、それと深く関係する介助実践の特性の観点から分析を行なった。その結果、内的変化として「オリジナルな価値との出会い」、介助の特性の面で「オーダーメイドの醍醐味」という中核カテゴリーを生成し、それらの構成を明らかにした。そしてそれらの意義の基点にあるのは、介助者という「機能」である前に一人の人間である自己を介在させてオリジナルな他者と向かい合うことであった。このことは、既存の価値観の抑圧に対して、障害者と介助者が同志になりうる可能性を示している点で重要である。

キーワード 介助者、積極的意義、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

## 1 はじめに

障害者の家族ではなく他人「介助者」と呼ばれる存在は、親元や施設を出て独立した生活を切り開いた重度障害者の生活と共に出現したといつてよいであろう。初期の「介助者」は、無償で介助をしつつ、障害者運動の同志である場合が多かった。しかし現在では、親元で暮らす障害児や知的障害者の暮らしを支援したり、介助を職業とする者も少なくないなど、その形態は多様化しており、「同志」<sup>1)</sup>という位置付けは薄れている。

さらに今後、2003年4月より支援費制度が開始され、障害者自身の生活の基盤となる制度が大きく変化すると同時に、その生活に深く関わる「介助者」のあり方も変化することが推測される。

障害者と「介助者」を取り巻く環境が大きく変化しようとしている今日、両者が営んできた実践について記述し、そこにある意義を明確にしておくことは意味がある。

本研究では、地域で生活を送る障害者とその介助者が営んできた日々の実践とはどのようなものなのか、それは介助者にとってどのような意義があるのかについて、介助者側の視点から明らかにする。何故ならば、障害者主導・利用者主体の原則を牽引している地域生活障害者の実践については、障害者側が理想とする介助者像が語られることは多いが、介助者側の言葉で、介助するという経験がいかなるものなのか、そこにある意義はどんなものなのかが語られ、伝えられることは少な

いからである。

先行研究においては、一介助者の立場から経験的に介助について語ったり<sup>2)</sup>、介助者の役割や介助関係について考察したもの<sup>3)</sup>はあるが、介助するという経験の積極的意義について実証的に明らかにしているものはない。障害者と介助者の関係については、結局は障害者が下という文脈で語られたり<sup>4)</sup>、障害者が上司で介助者が部下のような関係だと表現される場合<sup>5)</sup>もあるように、一様ではない。確かに、介助するという経験は、事象としてはそれぞれ個別のものである。しかし筆者は、その経験は個別で多様であるだけでなく、より普遍的な意義をもっていると考える。

そこで、本研究では、地域で生きる障害者とその介助者の日々の営みにおける介助者側の意義について説明する理論を、質的研究法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GT法）によって生成する。有償化が進み、職業化の方向へ進む「介助」の金銭的意義以外の部分に焦点をあて、内的意義を明らかにする。

なお、この研究によって生成されるグラウンデッド・セオリーの活用者、応用者としては、介助者自身、介助者派遣に類する団体の職員、およびそれに関わる人々を念頭においており、もちろん障害者の視点からも検討されることを期待する<sup>6)</sup>。

## 2 研究方法

本研究では、GT法を方法論として用いた。これは、医療社会学者GlaserとStraussによって1960年代に考案されたものであり、データに密着した継続的比較分析から独自の理論を生成する質的研究法である<sup>7)</sup>。GT法において、理論とは、データを解釈することによって生成した概念と、その概念同士を関係づけることによって現象を表現したものである。

GT法を用いた理由は、この方法が、限定され

た研究領域における現象についての説明力において、優れているとされるからである。本研究は、「地域生活を送る障害者の介助をする他人」という対象の限定を設定し、その他人介助者の経験を、「積極的意義」という部分に焦点を当てて（限定して）説明しようとするものである。

なお、本論文における分析は、GlaserとStraussの分析法を基に、より活用しやすく考案された修正版GT法を用いた<sup>8)</sup>。

### (1) 対象者

本研究において対象とした「介助者」とは、地域生活を送る障害者の介助をする他人であり、単発のボランティアは含まず、一定期間以上の介助活動を継続的に行なっている者とした。介助の形態としては、派遣団体による登録介助者、専従制、個人契約での介助者等、多様な形態を含んでおり、計20名である。

属性は、男性が8名、女性が12名である。その内のほとんどの者は、長年の介助経験の中で、様々な形態での介助を経験している。介助経験期間は、最短8ヶ月、最長28年、平均介助年数は9年半である。年齢別に見ると、20代10名、30代4名、40代5名、50代1名である。また、介助に関する仕事を主な仕事としている（介助派遣団体コーディネーター等を含む）者が10名であった。

その内、インタビュー実施時点で介助を続けない者（介助経験はあるがその時点では辞めていた人）は、3名であった。これは、積極的意義の対極例を明らかにするために対象にしたのではなく、他の対象者と同様に扱っている。

また、本稿における「障害者」とは、特に障害種別の限定はなく、知的障害者や難病者等も含まれ、障害児も含んでいる。

## (2) データ収集

データ収集期間は、2001年7月から2002年1月である。インタビューの方法は、一対一の面接方式により、半構造的インタビューを行い、承諾を得られた場合はテープに録音し、書き起こした。そうでない場合には、インタビュー中及び終了後に、可能な限りやりとりを書きとめた。インタビューは、現在の介助活動の形態等の答えやすい質問から始め、関わり始めたきっかけ、介助を通して感じていること等、自由に話を進めた。なお、インタビューは筆者と共同調査者1名で分担して行った。2名とも、5年以上の介助経験があり、その事実を伝えたくてインタビューを始めた。

なお、協力者の多くからは、自分の経験を振り返り総括する機会となったと、好意的な言葉をいただいた。また、類似のインタビューを受けた経験のある方が複数名いたこともあり、インタビューに答えることは、単に受動的なものではなく、自らの経験に意味を与える能動的な営みであるということを実感している方が多いという印象を受けた。

## (3) 分析方法

分析の流れを説明する。まずデータ全体の中から、研究テーマにそった関連箇所に着目してマーキングし、その部分の意味を解釈する。そしてその箇所を一つの具体例とする説明概念を生成する。概念ができると、その定義と具体例と共にワークシートに記入した。修正版GT法では、ここで生成した概念が分析の最小単位である。次に、新たな概念生成を行ないながら、既にある概念の有効性を確かめるために、その概念によって説明できる具体例のバリエーションを見出しつつ、解釈の恣意性を防ぐために類似例だけでなく対極例を意識してデータを検討した。

二番目に分析するデータは、最初のデータと対

照的な要素を多く含むと思われるデータを取り上げて分析し、概念のバリエーションを増やした。概念生成と同時に概念同士の関連を意識し、概念同士のまとまりであるカテゴリーを生成していった。

分析は全て筆者が行なったが、分析の質を確保するため、概念とカテゴリーの生成途中において、共同調査者が別途マーキングと概念化をし、両者の見解の相違等を話し合い、概念とカテゴリーの修正をする作業を行なった。また、作成した分析ワークシートをインタビュー協力者の一部にチェックしてもらい、概念から具体例がイメージできるか等の意見をいただいた。

## (4) 概念生成の例示

今回のインタビューでは、介助経験を通して、自分自身の不完全さへの言及が目立った。この不完全さとは、介助者としての不完全さだけではなく、人間としての不完全さを意味している。人間として完璧でないのはむしろ当たり前だが、そのことを直視し、受けとめることは難しく、その難しさが、生きることの窮屈さに繋がっているという側面が語られた。

例えば、プライドが高く、人に弱みを見せられない自分だったが、弱音を吐いてもいいんだ、泣いてもいいんだ、と思うようになったという文脈は、「自分自身が自分の弱さを受容した」と解釈し、「自己受容」という概念を生成した。

また、親との葛藤があり、自分の居場所を探しているような感覚が気持ちの奥にあり、不安定さがあった自分が、他者によって必要とされる「場」を得て、その場を居心地良く感じた、という文脈があった。これは「介助関係において受容された感覚を得た」と解釈し、「受容される感覚」という概念を生成した。

「自己受容」と「受容される感覚」は、「不完全

さの受容」というカテゴリーを構成する概念である。

このように、このGT法では、分析と考察が解釈作業として一体的に進められるため、結果と考察は3でまとめて示す。

### (5) 着眼点及び解釈の流れの概要

3の結果と考察において、生成した概念と概念同士の関係について説明するが、その意味するところをより明確に伝えるために、ここでは、それらの概念を生成する過程の着眼点を示す。

まず介助者自身の変化については、「～でなければならぬ」という固定観念から自由になるという変化が特徴的であった。これは、「強くなければならぬ」「ひとりではできなければいけない」という既存の支配的な価値観に捕らわれていた自分に気づき、そうではない在り方を肯定できるようになるという変化である。その変化は、一方で、自分自身の不完全さを受け入れることを促し、また一方で既存の価値観に縛られない生き方、姿勢を身につけて社会と対峙するということをも促す。そこで、「既存の価値」との対比において、「オリジナルな価値」がキーワードとなる。

次に、その変化を生じさせているものは何なのかについて焦点をあてると、他の誰でもないその人と向かい合うという「唯一さ」が強調されていた。それは、「障害者」などの枠組みでは総括できない具体的な個人であるという意味と、AさんでもBさんでもなくCさんであるという独自さを意味している。ここでは「オリジナルな存在」がキーワードになるが、介助関係においては、介助者もまた同じくオリジナルな存在であることが強調された。誰が介助をしても同じく保障されるべき一定のレベルはもちろんあるが、その人間性や考え方が諸々の介助状況に反映される。それだけでなく、多少なりとも介助者が自分自身を開いて関係を創っていくという面が表現された。そのこ

とが、介助関係の「オリジナルさ」を高めていると解釈した。

最後に、介助関係の特性としては、状況に応じて多様な役割が取られていることが分かった。しかしその役割の取り方も、外部から規定されるのではない。オリジナルな他者と、それに応答するオリジナルな自己によって生じるものであることに注目し、「オーダーメイド」をキーワードとした。

## 3 結果及び考察

介助するという経験の意義を明らかにするために、その経験による影響や変化の観点と、これに大きく影響する介助という実践の特性の観点、その双方から分析を行なった。その結果、オリジナルな価値との出会い、オーダーメイドの醍醐味、という二つの中核カテゴリーを生成した。これらは、例えるなら車の両輪のような関係にある。

内面的影響や変化を説明するカテゴリーとしてのオリジナルな価値との出会いは、その構成要素として、不完全さの受容、「普通」の相対化、オリジナルな他者の尊重、オリジナルな関係、という四つの構成カテゴリーをもつ。

介助実践の特性の観点からの意義としてのオーダーメイドの醍醐味は、重層的役割をとる、適切な距離感を測る、オリジナルな他者の尊重（再）、オリジナルな関係（再）、という四つのカテゴリーによって規定されている。

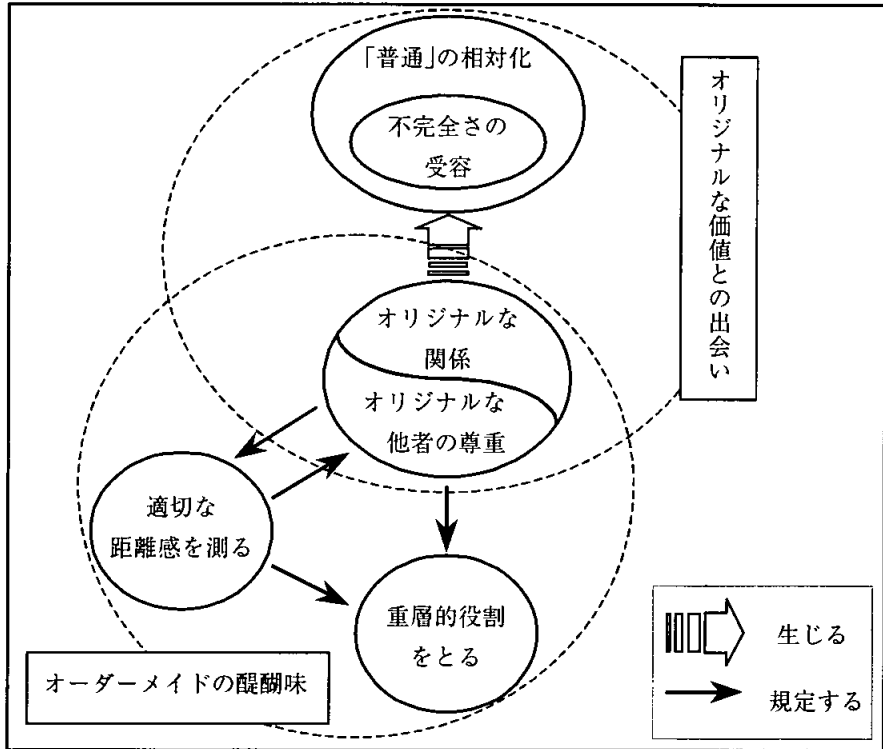
諸カテゴリーの関係は<図>に示した。

なお、この章における括弧を用いた口語体の文章は、特に断りのない場合、インタビューデータそのものの引用である。ただし、個人名はアルファベットで表記した。

### (1) オリジナルな価値との出会い

介助するという経験の意義について、介助者の内的変化や影響の観点から説明するカテゴリーと

<図>



して、オリジナルな価値との出会いという中核カテゴリーを生成した。これは、「介助を通じて、オリジナルな他者としての障害者に出会い、そのユニークさを尊重していく実践の中に、オリジナルな自己を介在させ、オリジナルな関係を育てていくことによって、他者の不完全さと同時に自己の不完全さを受容し、内面化していた既存の価値観が相対化されるという変化がおこること」と定義できる。

オリジナルな価値との出会いを構成するカテゴリーは、不完全さの受容、「普通」の相対化、オリジナルな他者の尊重、オリジナルな関係、であり、オリジナルな他者の尊重とオリジナルな関係を基点として生じる内的変化が、不完全さの尊重と「普通」の相対化である。

### ①不完全さの受容

不完全さの受容とは、「介助を通して、必要とされる充足感を得るだけでなく、不完全さをもつ自分が、障害者との関係の中で受容され、自分自身も不完全な自分を受け止め、受容することができるようになること」と定義される。これは、自己の内側へのベクトルをもつ変化としてのカテゴリーである。このカテゴリーを構成する概念は、必要とされる充足感、受容される感覚、自己受容の三つである。

#### 1) 必要とされる充足感

介助者であるということは、介助なくしては生きること自体が危ぶまれる存在である障害者に、究極的な意味で必要とされることである。生命維持に関わる介助であればあるほど、いてもいなく

でもどちらでも良いのではなく、どうしても必要なのである。それは、介助者にとっては頼られすぎる負担感にも繋がるが、同時に自己の内的欠乏感を補う充足感にも繋がる。例えば、日々が充実していなかったり、仕事に手ごたえがなかったり、自分の存在意義を見つけられなかったりというような感覚を埋めることにも繋がるのである。しかし、この充足感が、本稿で説明する他の要素とのバランスを保てずに膨張すれば、それは否定的意味を帯びた「自己満足」と同種の危険性を孕んでいる。(この危険性については、本稿では主題的に取り扱わない。)

## 2) 受容される感覚

介助関係において役に立つことができるという実感は、充足感だけではなく、自己の存在が肯定され、不完全さを内在したまま受け止められるという感覚でもありうる。「多分、出会ったときに、私、楽になったんだと思う。だから、役に立つっていうとき、何にも知らなくて、何にも分らなかったけど、やればできるっていうか、そのまま、別にいいっていうか。何にも知らないで、なんかこうしなきゃとかあしなきゃとか、考えたり、学んだりする前で、ほんといっただけで、役に立ってるよっていうメッセージっていうか、受け入れられたような気はしたよね。最初の時ね。」

行為としての介助は「する・される」という一方向のものであっても、介助者は、その関わりを通して、自己が他者にとって意味のある者として在る「場」を見出している。それは、受容されるという受動的な経験でもある。

## 3) 自己受容

介助経験は、他者によって受容されるだけでなく、自分自身が負の部分をも含んだ自己の存在を受容することにも繋がっていく。それは次のように表現された。「その前までは天狗だったというか、プライドが高かったというか、ええ、そうい

うあれだったんです。で、逆に息苦しくなっていたっていうか、っていう部分があったんですけど、まあ介助とかやって、別にその、見栄とか、そういう、あの、なんかなあ。がんばらなくていいって感じ? そうそう、…つよがんばらなくてもいいっていうか。つらい時は別につらくてもいいなあっていうか。そういうふうにはなった、一番の転換。」

## ②「普通」の相対化

「普通」の相対化とは、「介助経験によってある種のカルチャーショックを受けつつ、未知のものへの欲求を持ちながら関わり続けることで、社会へのオルターナティブな目線を身体化し、自分の生き方が解放されていくという変化」と定義される。これは、自己の外側へのベクトルをもつ変化としてのカテゴリーである。構成概念として、カルチャーショック、未知のものへの欲求、生き方の解放、オルターナティブな目線がある。

### 1) カルチャーショック

介助を通して、地域で生きる障害者と出会うことは、それまで無意識に内面化していた価値観や世の中の基準が相対化されるようなインパクトのある出会いである。時にそれは、自分自身が厳しく問われることでもある。そのインパクトを積極的、前向きに受け止めていける場合、介助者の内面的価値観は変容していく。その変化は次のように語られた。「ずっとやっぱイメージって言うか、いろいろ、こうしなくちゃならないっていうか、自分のことは自分でしろとか、自分で金稼いで、自分で生活基盤をつくってこうしろとか、なんとなくの一般常識じゃないですけど、なんかそういうのがあったんですけど、別にできなくても、ちゃんと生活してっていうか、僕よりもっとすごくこう、なんか、生活している人がいるし、そういうのが、価値観というか、見方というか、その辺は変わったなと。」

## 2) 未知のものへの欲求

これは、関わり始める動機でもあり、関わり続ける理由でもある。介助関係の中では、自分の中にある既存の枠組みでは説明できない事態に遭遇し、自分とは違う存在の在り方・価値観と出会うことになる。それは多くの場合葛藤でもありうるが、「興味」「新しい発見」という言葉でも表現されたポジティブな経験でもある。「一番最初の頃は、やっぱりもうやること全て、すごい新鮮で面白かったのかもしれないよね。…やっぱりなんか、自分が感じたことのないことを色々感じたんだろうね。」

このことについて、脳性まひ者の小佐野は、「相互の関わりにおいて、想像力をもって仮説を立て、それを検証していく不思議発見のプロセス自体に意味を見出したい。違いを否定するのではなく、『どうして～と考えるのだろうか』というような興味をもって関わり続けること自体が保障される必要がある。」と述べている<sup>9)</sup>。

## 3) 生き方の解放

健常者として生きる介助者も、「～であるべき」「～でなければならない」という狭い固定観念や窮屈な価値観の中で、抑圧されている場合も多い。介助経験は、その窮屈さから自由になる契機にも成りうる。「介助に入って、お化粧をすることがあんまり意味ないなって思い始めた。それは介助でどうせ汚れるからとかそういうんじゃないで、外側を飾ることなんてなんの意味もないなって思ったんだよね。」美しくあることが良いこと、という一つの価値観は、当然視され、時に暴力的でもある。その価値観から自由になる契機を、介助経験が与えている。

## 4) オルターナティブな目線

自己の行動の基準としての価値観が影響を受けるということは、社会への眼差しも自ずと変化することとなる。今までもっていた視野とは別の、

新たな価値観を伴う社会への視座を持つに至る場合も多い。例えば、建物の段差や道の途中で意味なく途切れる点字ブロックへの気づきに始まり、次のような「当たり前」への批判精神として表れることもある。「老人ホームでは、テキパキしてるのが良いとか、ちゃんと仕事をきちっとやるのが良いとか言うけど、私とか、そういう関わってきた人からすれば、これだけの人数で、どんどんおむつ交換やっていくの、へーと思うわけじゃない？毎日、七回取り替えるからそれが何よって思うわけじゃない？」

## ③オリジナルな他者の尊重

上で述べた不完全さの受容と「普通」の相対化は、介助者自身の内側へのベクトルと外側へのベクトルをもった変化だが、その変化の基点としてあるのが、オリジナルな他者の尊重とオリジナルな関係というカテゴリーである。これらは、介助経験の積極的意義を生じさせる基点としてある。

まず、オリジナルな他者の尊重とは、「介助においては、『いま・ここ』への集中力をもって向かい合う日常のプロセスが重視され、既存の物差しや価値観ではなく、十人十色の存在の仕方が尊重されること」と定義される。これは介助関係の核となる原則である。構成概念は、十人十色と「いま・ここ」への集中力である。

### 1) 十人十色

これは、介助においては画一的な方法やゴールがあるのではなく、ニーズの物差しは介助を必要とするその人自身の中にあり、それぞれがその人らしくいられることが目指されるという介助の原則である。それは例えば次のように語られた。「その人その人に合ったサポートの仕方があるんだし、それが分かっていたら良いと思ってた。Aという人のニーズは、そこにしかないんだからって。」

## 2) 「いま・ここ」への集中力

これは、介助によって目指すものは、画一的な到達点ではなく、目の前の生のその人と向かい合うプロセス・日常が重視され、そのための集中力が介助者には必要だということを表している。この「集中力」と同質のものを、ミルトン・メイヤロフは『ケアの本質』の中で「専心」という言葉で説明している。専心とは何かについて次のように述べている。

「“そこに” その人のために私がいる、ということによって示される。」

「他の誰でもないこの他者へのケアが実質を持ち固有の性格を帯びるのは、この専心を通してなのである。」<sup>10)</sup>

介助とはどのようなものかという問いに、「精神的労働」であるという答えがあったが、それは相手に対する集中力を維持した時間を提供するという側面を表している。このことが、相手を尊重するためには必要である。介助とは、単に同じ時間と場所を共有しているだけではないのである。

## ④オリジナルな関係

オリジナルな関係とは、「介助関係において、介助者である前にひとりの人間である【自己】を介在させ、介助するという【機能】の土台となる人間関係を育てていくこと」と定義される。自己の介在と人間関係が構成概念である。

### 1) 「自己」の介在

これは、介助関係においては、介助をするという「機能」として在る前に、人間としての感じ方や考え方、価値観が問われる場合が多いことや、好き嫌いなどの人間的感覚をゼロにして関わることはできないということの意味する。

「その、誰さんちに行って、どうしてもこう、俺の感覚だとやめてもらいたいこと、とかって出てきちゃう、ったりした時に、うーん、まあ、少

なくともああ仕事なんだからしょうがないっていう風には自分として、割り切らないようにしようっていうか、そこでなんにも気持ちが動かなくて体が動くようになった時は、まあ引退かなって思ってるんですけどね。」

この介助者は、むしろ、割り切って、自分を殺して求められる介助をすることの方が楽なのだが、と続けている。しかし、それでは「自分」が介助をしている独自の意味がなくなる。いま、ここにいるのは他の誰でもない「自分」であることの意味がなくなってしまふ。この感覚は、相手を尊重することとの間で葛藤を起こす。葛藤がなければ単なる自己主張であり、介助を活用して生きるその人らしい生活を脅かすものともなる。

### 2) 人間関係

この概念は、「介助関係は、介助者の人生におけるひとつの出会いであり、関係を深めていくことが介助関係を成り立たせる基盤である場合が多いこと」を意味している。

介助者にとっては一対一の関係づくりでも、障害者にとっては一対多数の関係であるから、常に関係を深めることを求められたら負担だという声もあるだろう。確かに、介助者側の思い入れによって関係を深めることが求められる場合は負担だろう。しかし、仮に介助の基本は意志の疎通だとして、その意思疎通さえ、関係が生まれなければ成り立たない場合もある。例えば、知的障害者の介助をする場合である。また、既にあらゆる方法を使ってもほとんど言葉を表出することができなくなった進行性の難病者の場合、長い月日をかけて培ってきた関係のある介助者によってのみ、自分らしい生活が保たれる場合がある。

言葉での意思疎通が難しい相手の介助について、次のような言葉があった。「本人とこう、一緒にいる時っていうのは、わずか、二時間とか三時間の間でも、いろんな発見をしつつ、うん。



一ヶ月くらい入っていると、いろんなこと見えてきて、こっちも向うに慣れて、その利用者も自分に慣れたりすると、いろいろ見せてきたり。関係性が微妙に、こう、ね、成長していつてるのか、退化していつてるのか、わかんないけども。」言葉での意思疎通が難しい場合はむしろ、非言語のコミュニケーションで探りあい、お互いを認識するプロセスが意味を持ってくる。

## (2) オーダーメイドの醍醐味

介助実践の特性の側面から、オーダーメイドの醍醐味という中核カテゴリーを生成した。「介助関係において、オリジナルな他者の尊重を基点としつつも、そこにオリジナルな関係を影響させ、独自の適切な距離感を測りながら、それに応じた重層的役割をとる実践における意義」が、オーダーメイドの醍醐味である。これを構成するのは、既に(1)で説明したオリジナルな他者の尊重とオリジナルな関係というカテゴリーと、それらによって規定される、適切な距離感を測る、重層的役割をとる、という二つのカテゴリーである。

### ①適切な距離感を測る

適切な距離感を測るとは、「介助関係における密着度と閉鎖性を適切に調整し、介助役割を離れた自分自身あるいは自分の生活とのバランスを取ることが、介助関係を維持すると同時に良い介助を行うために重要であること」と定義される。構成概念は、密着度、閉鎖性、バランスをとる、の三つである。

#### 1) 密着度

これは、プライベートに入り込むという介助の特徴と、介助なしには生きていけないという相手の切迫性によって、あるいは介助者側の「必要とされる充足感への精神的依存」によって、関係の密度が増していく傾向があることを表している。

「精神的に、すごくくっついちゃう、そうでないといけない感じがする。介助自体が。…話をするとか、そこが痛い、あそこが痛い、今の悩みはこれだ、とか。…すごいなんか、精神的な距離が近いなあって。私は、それが、居心地が悪くなる時があるので。近さが。気分が、一緒に引きずられて重くなっちゃうとか。してる時は、すごい深い感じがするんですよ、関係が。けど、ふと我に返ると、居心地が悪くなったりして。」

#### 2) 閉鎖性

これは、介助は多くの場面で一対一であり、生活の場に入り込み、長時間を共に過ごす性質のものであるが故に、風通しが悪くなりがちで、関係が悪化する危険性を孕んでいるという介助の性質を表している。

これを上手く回避できる例として、家族やペットと暮らしている人の介助の場合がある。「AとBっていう、別の人がいるわけじゃない？それが良いクッションにはなるよね。」

#### 3) バランスをとる

これは、生活における介助時間の比重や、自分の生活における様々な要素との重みの調節が重要であることを表している。

介助は楽しいかという問いに対して、次のような答えがあった。「うん、体力が相当きつくない限りはね。精神力も入るかもしれないけど。3日連チャンで泊りとかになると、体力も気力もめちゃくちゃになるじゃない？案の定、その時は確か、からだ壊した。3日も、違う人の介助で。」

また、バランスをとることが介助者自身にとっただけでなく、相手にとっても大切であることは、次のように表現された。「私は、必要以上は関わらない。『介助に入って』って電話がかかってきても、困ってるんだらうって分かるけど、やっぱり断わる時は断わる。…こっちの気持ち安定してないと、余裕がないと、良い介助ができない

から。だって、ちゃんと話を聞けなくなる。」

## ②重層的役割をとる

重層的役割をとるとは、「介助者は、時間、場所、思いを共有し、安心を提供しつつ、必要に応じて、時にアドバイザー的な役割を取ったり、意志を具体化する役割を取ったりという様々な側面をもって関わるという介助の特性」と定義される。構成概念は、アドバイザー、具体化する、共有する、安心を提供する、の四つである。

### 1) アドバイザー

これは、介助者の役割の一側面として、提案や助言をしたり、時に励まし、良い方向に進むよう後押ししたりすることがあることを表している。

アドバイスが受け入れられることもあり、受け入れられないこともある。その選択を許さないのであれば、それはアドバイスではなく単なる押し付けになってしまう。

### 2) 具体化する

これは、介助者の役割の主要な要素として、障害者の意志に従ったり、思いを推し測ったりしながら現実の行動としていくことを意味している。

障害者が自分の意志を伝えることができる場合、例えばいわゆる「自立生活障害者」の場合等、介助者が推測で動くことは否定的されるべきことだろう。しかし、特に知的障害者の介助の場合や意志の疎通がスムーズでない場合には、推測しながら意志を確認したり、促したりする場面が出てくる。いずれにしても、介助を通して生活や行動を具体化していく。

### 3) 共有する

これは、その障害者の生活や成長のペースに合わせ、経験や思いを共有しながら、かつ共に主体的な者としてその「場」を共有している側面を表している。このことは、例えば次のように表現された。「『私の存在意義は…』って話を延々2時間、

コーヒー一杯で聞くっていう介護の時もある。『どうせ分からない』『わかるよ、少なくとも分かるようにしてるじゃないか』の繰り返し」「喜怒哀楽を共有する。同方向に、同じ感情になるって意味じゃなくて、対立したとしても、人生の空間を共有している」

### 4) 安心を提供する

これは、責任を持って身体を預かり、安全を守るだけでなく、距離を取っている時にもとっさの対応ができるように身構えて待機したり、見守ったりし、また健康状態などを把握するよう努める側面を表している。

## ③オーダーメイドの醍醐味の構成

①と②で説明した概念は、(1)で説明したオリジナルな他者の尊重とオリジナルな関係というカテゴリーを基点にもつことによって、単なる「機能」ではなく、オーダーメイドの醍醐味という意義を伴うものとなりうる。そのことは、例えば次のように表現されている。「どんなハンディを持っていようが、いい奴もいるし、悪い奴もいるってこと。世間的にいい悪いもあるし、自分に合うか合わないかも。お互いの価値観とか感情を出し合わなきゃいけないと思う。…『障害者』って括ったら、いい介助はできないと思う。その人にとっていい介助もできないし、やってる俺らも楽しくないと思う。」自分を見せ合うから面白いし、自分を見せるからこそ、本当の意味で相手も見えてくるのだと思われる。

また、重層的役割のとり方は、オリジナルな他者の尊重とオリジナルな関係によって規定されるだけでなく、両者の独自の距離感によってもまた規定されている。例えば、ある関係においては「大きなお世話」である介助が、ある関係においては「意味あるアドバイス」となる場合もある。月に2回だけ、ある女性のところへ介助に通う自

分の立場を測って、次のように述べた介助者もいる。「例えば、Aさんはすごく太ってたから、いろいろ食事とかについて、こういうのがいいよ、ああいうのがいいよ、これはやめた方がいいよとか、言う人は多かったけど、…ほんとに責任もってさ、食事制限付き合っさ、やっていけるんだったら、そういうふう提案するっていうのもあるけど、月に2回しか行かないのに、それでなんか言うのもどうかなっていう気もするし。」このように、距離感に応じた役割のとり方が選択される。

つまり、オリジナルな他者の尊重を基点とするが、そこにオリジナルな関係が影響し、独自の適切な距離感を測りながら、それに応じた重層的な役割をとることこそが、オーダーメイドの醍醐味である。

#### 4 結論

本研究では、介助実践とはいかなるものであるかを介助者の視点から明らかにすると同時に、それは介助者にとってどのような積極的意義があるのかについて明らかにした。GT法を用いることによって、個々の介助経験を、単なる個別の体験を超えた、より普遍的な意義として提示した。

介助者は、オリジナルな他者と向かい合いつつ、自己を開き、自己の存在とも向かい合うという双方向的な営みに身をおいている。そのことが、人間や社会への眼差しとしての、オリジナルな価値を得るという積極的意義に繋がっている。そしてその側面は、介助特性の面において、両者の適切な距離感を測りつつ、それに応じた重層的役割をとるという側面とも分かちがたく関係している。

つまり、第一に、介助者という「機能」である前に一人の人間である自己を介在させてオリジナルな他者と向かい合うこと、第二に、そこから具体的で固有な役割の取り方を生じさせること、第

三に、その経験と実感が人間としての価値観に影響を与え、既存の価値観を相対化できることが、積極的な意義を構成していることを明らかにした。このことは、既存の価値観の抑圧に対して、障害者と介助者が同志になりうる可能性を示している点で重要である。

しかしこのことは、自己を介在させることと他者を尊重することとの両立はいかにして可能なのかという問いには、答えを持たない。また、自己を介在させない介助であっては、ここで述べた意義が全く得られないのかについては検討できていない。今後の課題としたい。

介助者もまたオリジナルな個人であり、そのことを積極的に位置付ける関係づくりが重要であることを述べた。しかしそれは、深い関係がつかれない場合には、介助はできないという意味ではない。また、介助関係は相性の問題に集約されるという主張でもない。ここで明らかになったことは、介助者が「機能」としてある前に、オリジナルな個人としてオリジナルな他者の前に立ち表れる実感が、介助者の積極的意義に繋がるということについてである。その実感を伴うのであれば、その時、「機能」は、関係の中で柔軟に形を変え、生成されていくという魅力にも繋がるのである。

もし、介助者が、「機能」である前に、オリジナルな個人であるという部分が軽視される方向へ進むとしたら、介助は、障害者主導の原則に従ったとしても、機械的な行為となり、ここで述べた積極的意義が失われることが危惧される。介助者側の「気持ち」を過大評価して利用するのではなく、ビジネスライクなものとして割り切るのではなく、障害者と介助者が新たな意味で同志になりうる可能性を模索しつづける必要がある。障害者を取り巻く問題の「当事者」を、狭く限定しないために。

## 付記

インタビューにご協力いただいた介助者のみなさまに、深謝申し上げます。

なお、本稿に用いたインタビューデータは、日本女子大学大学院の田中恵美子さんとの共同調査によって収集したものである。

## 註

- 1) この言葉は、究極の「今や至急にしなければならぬことは介助者の自律性をそのままにしてほったらかしにしておくのか、それとも介助の意味を再定義し、ふたたび何らかの形での同志、連帯者にしていくのか、ということであろう。」(究極 1998) という主張に依拠して用いている。
- 2) 例えば、糸賀 1998、末永 1998、西浜 2002
- 3) 主なものとして、岡原 1990
- 4) 西浜、前掲書 152頁
- 5) 西浜、前掲書 154頁
- 6) 本稿が方法論として採用する修正版GT法においては、研究結果が読者によって試され、修正されていくことを積極的に位置付けており、そのため、応用や活用がしやすい形で研究結果を示すことが研究結果の質において重要だとされている。(木下 1999 92-94 頁)
- 7) Glaser, B., & Strauss, A. 1967
- 8) 木下 1999、同2001
- 9) 涌井 1993 39頁
- 10) ミルトン・メイヤロフ 1996 24-25頁

## 文献目録

Glaser, B., & Strauss, A. 1967, The discovery of grounded theory. Adine (後藤隆・大出春江・水野節夫 [訳] 1996『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだす

か』新曜社)

- 糸賀美賀子、1998『「介助者」という仕事と、介助される側と一地域に根ざした日本流『自立生活』』『福祉労働』 Vol.79
- 木下康仁、1999『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂
- 木下康仁、2001「質的研究法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ—その特性と分析方法—」『コミュニティ心理学研究』 Vol.5, No.1
- 究極Q太郎、1998「介助者とは何か？」『現代思想』 Vol.26-2
- ミルトン・メイヤロフ、1996『ケアの本質 生きる ことの意味』ゆみる出版
- 西浜優子、2002『しょうがい者・親・介助者—自立の周辺』現代書館
- 岡原正幸、1990「コンフリクトへの自由—介助関係の模索」『生の技法』藤原書店
- 末永弘、1998「介助者と障害者の関係について—介助者の立場から考える」『福祉労働』 Vol.79
- 涌井理恵、1996「障害当事者の権利意識の発展と今後の方向性—社会的相互性の観点からの考察—」日本女子大学人間社会学部社会福祉学科卒業論文